



れふアレンス通信

No. 11

2011. 10. 1
石川県立図書館
利用サービスグループ
〒920-0964
金沢市本多町 3-2-15

郷土の文士

藤澤清造

◆ 藤澤清造とは

明治22年、鹿島郡藤橋村(現七尾市馬出町)生まれ。尋常小学校卒業後は足袋屋や代書屋などに奉公しますが、右足に骨髄炎を患い、後遺症で足を引きずるようになります。

明治39年に上京し、新聞配達や弁護士の玄関番などの職を転々とする一方、徳田秋声や室生犀星、小山内薫、三島霜川らと交流を持ちます。上京当初は俳優志願でしたが、足の後遺症のため断念し、文学を志すようになります。明治43年、演芸画報社に入社して編集や執筆に携わった後、大正11年、日本図書出版から長編小説『根津権現裏』を出版し、田山花袋や島崎藤村らから称賛を得ました。

小説のほかにも戯曲などを発表しますが、寡作と放蕩生活により困窮を極め、精神も病むようになります。そして昭和7年1月29日、東京の芝公園で凍死体となって発見され、身元不明者として茶毘に付されました。後に清造と分かり、徳田秋声や室生犀星ら有志によって芝増上寺別院で葬儀が執り行われました。

◆ “没後弟子”の芥川賞受賞

藤澤清造が再び脚光を浴びるきっかけとなったのが、作家西村賢太氏の第144回芥川賞受賞でした。

昭和42年東京生まれの西村氏は、中学卒業後、港湾作業員や警備員などの日払い仕事で生計を立てていました。20歳過ぎから私小説家の田中英光に傾倒しますが、29歳の時に酒に酔って事件を起こしたことがきっかけで藤澤清造に傾倒し、“没後弟子”を名乗るようになります。

清造に没頭した西村氏は、清造の月命日の墓参りや資料収集のために七尾でアパートを借り、月の半分を東京、もう半分を七尾で過ごすという生活を4年ほど続けました。

その間、2001年には清造の追悼会を復活させ、毎年命日には清造忌を執り行っています。

さらに、清造のお墓のある西光寺から清造の墓標を預かって保管し、清造の墓の隣には自身の生前墓を建てました。この墓には清造の自筆原稿から文字を抜き出し、見つからなかった文字は部品を組み合わせて、「西村賢太」の名前を彫るほどのこだわりぶりです。

西村氏は全7巻の清造全集を長年企画しており、今秋にも第1巻の発行を目指しています。

また、西村氏の受賞で注目を浴びた清造の代表作『根津権現裏』が今年、新潮文庫となって発行され、西村氏が本文校訂、解説を手がけています。

<参考文献>

- 「特集Ⅰ 芥川賞で浮かんだ“郷土の文士”藤澤清造」『北國文華』第47号 北国新聞社 2011. 3
- 小林輝治ほか『石川近代文学全集 5 加能作次郎・藤澤清造・戸部新十郎』石川近代文学館 1988. 2
- 西村賢太『一私小説書きの弁 随筆集』講談社 2010. 1
- 北陸中日新聞 2011. 2. 11 朝刊「芥川賞の西村賢太さん 藤澤清造忌で七尾来訪」

◆ 当館所蔵 藤澤清造関連資料

- 『石川近代文学全集 5 加能作次郎・藤澤清造・戸部新十郎』（「根津権現裏(抄)」「狼の吐息」「家康入國」の評判」「生地獄図抄」収録）小林輝治 || [ほか]編集 石川近代文学館 1988. 2 K908/3/5 ※評伝・作品解説・年譜掲載
- 『石川近代文学全集 15 近代戯曲』（「恥」「嘘」収録）
小林輝治 || [ほか]編集 石川近代文学館 1990. 8 K908/3/15 ※作品解説・作者紹介掲載
- 『根津権現裏』 藤澤清造 || 著 日本図書出版 1922. 4 913.6/3558
藤澤清造 || 著 新潮社 2011. 7 913.6/22225
- 『藤澤清造貧困小説集』 藤澤清造 || [著] 勝井隆則 || 編 亀鳴屋 2001. 4 913.6/16896
- 『のたれ死にでもよいではないか』 志村有弘 || 著 新典社 2008. 4 910.26/10331
- 『風土への回帰 日本海辺の文学』 小林輝治 || 監修・編集 八木光昭 || 編集 南信雄 || 編集 能登印刷 1985. 11 K902/43
- 『藤澤清造をめぐる感想』（『古典と現代』62号抜刷）塚本康彦 || 著 古典と現代の会 1994. 9 910.26/107
- 『藤澤清造狂死記』 半浦めぐみ || マンガ著 石川県立七尾商業高等学校図書委員会 || 編
石川県立七尾商業高等学校図書委員会 1995. 10 K902/109
- 『編年体大正文学全集 第11巻 大正十一年』 ゆまに書房 2002. 7 918.6/10015/11
- 『夢 横川巴人作品集』 横川巴人著 横川巴人会編 横川巴人会 1969
- 『能登往来』第9号 藤澤清造追悼号 能登往来社 1953. 9
- 「藤澤清造の手紙」岡部文夫（『能登往来』第10号 能登往来社 1953. 11）
- 「藤澤清造 その人と文学の故郷」柴田みひろ（『金澤文学』第23号 金沢文学会 2007. 8）
- 「どうで死ぬ身の一藤澤清造の『根津権現裏』」相澤道郎（『北風通信』第16号 『北風通信』発行所 1987. 11）
- 「悲惨な末路」という伝説—藤澤清造 杉森久英（『文学界』第33巻第12号 文化公論社 1979. 12）
- 「藤澤清造のこと」杉森久英（『北国文化』第59号 北国新聞社 1950. 11）
- 「藤澤清造聞書」相川竜春（『北国文化』第62号 北国新聞社 1951. 2）
- 「破滅に殉じた“能登の江戸っ子” 小説家・藤澤清造～その人と生涯」西村賢太（『北國文華』第7号 北国新聞社 2001. 3）
- 「十年一日」西村賢太（『北國文華』第31号 北国新聞社 2007. 3）
- 「特集Ⅰ 芥川賞で浮かんだ”郷土の文士“藤澤清造」（『北國文華』第47号 北国新聞社 2011. 3）

◆ 当館所蔵 西村賢太作品

- 『どうで死ぬ身の一踊り』 西村賢太 || 著 講談社 2006. 1 K936/1055
- ◎第134回芥川賞候補 ◎第19回三島由紀夫賞候補
- 『暗渠の宿』 西村賢太 || 著 新潮社 2006. 12 913.6/20240
- 🏆第29回野間文芸新人賞受賞
- 『一私小説書きの弁 随筆集』 西村賢太 || 著 講談社 2010. 1 914.6/13629 ※藤澤清造年譜掲載
- 『苦役列車』 西村賢太 || 著 新潮社 2011. 1 913.6/22037
- 🏆第144回芥川賞受賞
- 『寒灯』 西村賢太 || 著 新潮社 2011. 6 913.6/22272
- 『文学 2006』（「一夜」収録）日本文藝家協会 || 編 講談社 2006. 4 913.6/2690/006
- ◎「一夜」：第32回川端康成文学賞候補
- 『文学 2009』（「廃疾かかえて」収録）日本文藝家協会 || 編 講談社 2009. 4 913.6/2690/009